法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-16

環境問題への哲学的アプローチとはなにか ：環境思想の可能性を探る序論その1

Sekiguchi, Kazuo / 関口, 和男

(出版者 / Publisher)
法政大学人間環境学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
人間環境論集 / 人間環境論集
(巻 / Volume)
1
(号 / Number)
1
(開始ページ / Start Page)
105
(終了ページ / End Page)
116
(発行年 / Year)
2000-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002866

Hosei University Repository

環境問題への哲学的アプローチとはなにか
―― 環境思想の可能性を探る序論そのⅠ ――

関　口　和　男

はじめに
1. 環境問題の内包する複雑さの意味
　1) アモルファスな性格
　2) イデオロギーとしての性格
2. 哲学的アプローチ、その意味と意義
　1) 哲学思想のグローバル化
　2) 哲学思想のローカル性
おわりに

はじめに

今日、環境および環境問題についての人々の関心の高さは、駅前のちょっとした書店の棚に目をやるだけで一目瞭然である。ゴミ処理などの生活環境問題から、自然保護に関する自然環境問題、さらにはわれわれの住むこの惑星を「宇宙船地球号」と捉える視点を要請する地球環境保護論へと拡がるこれら環境問題とその運動は、周知のように、東西冷戦後の世界のもっとも主要な関心事となってきている。この風潮は、とくに身近なダイオキシン汚染問題について何らかの意識や意見を持っていなければ、現代社会に生活する者としては後ろめたさを感じないではいられないほどである。

現代のこのようなエコロジー（生態学ではなく、エコロジズム）の風潮に刺激されてか、バスに乗り遅れるなとばかりに、わが国の思想界においても、北米・イギリスを中心に70年代に活発化し始めた環境問題の哲学的・倫理学的研究に追随するかたちで、ようやく環境問題に関する哲学的・倫理学的な議論が積極的に展開されるようになった。だが、残念なことには、ごく一部を除いて、それらの議論の内容が、旧態依然とした姿勢、すなわち明治初期以来の外国文化受容のように、欧米の思想の紹介ないしはそれの焼き直しに終始しているかのような印象を人々に与えてしまっているのである。現代の日本は、たとえ不況とはいえ、超一流の経済大国として厳然と世界に覇を唱えており、その結果としての環境問題に対しても他の先進諸国にひけをとらない（！）ほど重要な立場にあるにもかかわらず、その思想界は、かくのごとき状況である。なにも、われわれ日本人好みの自虐的な自己批判をしているのではない。ただ欧米の論調を無批判的に受容紹介して、それでことが済むのかということなのである。むしろ、環境問題に対しては、欧米の思想界と共時的な関係にあることを十分に自覚して、対等の立場に基づく相互批判の精神が、今まさに必要とされていることを言いたいのである。

また、「環境問題を考える」ことは、上記のように、この問題の重要性や緊急性のゆえに、往々にしてヒステリックなイデオロギーを形成しやすい。それは、環境問題が、世界平和の問題と同様に、いかなる人にとってもその結論が明瞭だからである。本来生態学を意味するエコロジーということばが、いつの間にか環境保護運動としてのエコロジーとして理解されてしまっているのは、その好例であろう。到達点が明らかな事柄については、それに向けての直線的なベクトルを描いて問題解決を図ろうとすることは、あまりにも強引な手法であり多くの困難な問題に逢着しかねないことは、歴史の教訓である。そこで今、環境問題に関して重要なことは、たんに環境問題への意識を覚醒させるという運動だけではなく、「環境問題を考える」際に無批判的に使用されるもっとも基本的な諸観念そのものに意識的に批判的な目を向け、そこに最大可能な合意を見いだし多元的な世界における新たな調和を創造しようとする積極的な思想的営為ではないかと思われるのである。

すでに述べたように、環境を良いようにしようとすること自体に関して、異を唱える人はまずいないであろうが、平和論議と同じように、各論に

Hosei University Repository

なると様々な局面で摩擦が起きるものである。この事態での論議を回避して生産的な合意を創出していくためには、まず各論での摩擦の原因とその思想的背景へと目を向けるべきであろう。そのためにはなによりも、「環境問題を具体的かつ普遍的に考える」姿勢が、要請されなくてはならない。もちろん、この点に関して、既存の環境倫理学の成果や動きを積極的に評価する向きも多いかと思われる。しかし、その諸学説が、将来の世界の示すべき真のグローバル化に、はたして十分対応し貢献しているのか、はなはだ疑問である。高度資本主義における市場経済の論理が世界を席巻しつつある現在、それに随伴する形で政治・文化の西欧的価値観が世界の各地域に浸透しつつある。だが、そのような地域で頻発している近代西欧的な価値観と土着の伝統的価値観との衝突は、南北問題や北北問題に見られるように、環境問題にとっても決して無縁ではあり得ないのである。そこでの事態は、市場経済のグローバル化がそれに随伴する価値観のグローバル性を必ずしも保証しはしないのではないかという疑いを惹起しつつある。

では、その本性上グローバルであらざるを得ない環境問題を具体的かつ普遍的に考えるには、いったい何がまず要請されなくてはならないのであろうか。それは、環境問題への哲学的アプローチそのものの可能性如何を問うことである。そこで、以下においてはまず環境問題の根本的性格を明らかにし、その性格に対応する哲学的アプローチの可能性の契機として、思想のローカル性について考えていきたい。それはまた、環境倫理学をも含めてのグローバルな哲学思想としての環境思想の可能性を模索するささやかな試みでもある。

Ⅰ．環境問題の内包する複雑さ

現代の環境問題が孕む複雑さは、環境問題に真摯に取り組もうとする者を躊躇させる何かをもっているように思われる。そのような感覚は、どこからくるのであろうか。以下においては、それを、環境問題のアモルファスな性格とイデオロギーとしての性格のうちに捉えて明らかにしていきたい。

1）アモルファスな性格

すでに述べたように、一口に環境問題と言っても、ゴミ処理などの身近な生活環境から温暖化・酸性雨などの大規模な地球環境にまでおよぶ広範囲の事象を含んでいる。この、モグラ叩きのようなつかみ所のない問題のそのつかみ所のなさはどこからくるのであろうか。

佐倉氏は、このような環境問題のあり方を「地球環境問題複合体」と命名している[(1)]。それは、環境問題が「ひとつのまとまった実体ないし問題群として存在するのではな」く、「問題群の複合体（コンプレックス）であり、空間的・時間的なアモルファスである」、という。氏の指摘するように、そこでは、政治、経済、科学・技術、教育、生活様式、価値観・倫理観の各分野とそれらから派生する諸問題とが密接な関連をもって複合体を形成している。しかも、それがアモルファスである以上、全体像を的確に捉える可能性を有するアプローチは存在せず、複数のアプローチの共働のみがその可能性を僅かながら与えてくれるものと考えざるを得ないこととなる。

このような環境問題の解決へのひとつの方法論的アプローチとして、現在、「制度・システムの変革」、「技術の革新」、「意識の改革」が各方面で声高に説かれている。だが、三つの側面からの総体的解決を目指すこのアプローチは、その三者が相互にどのような内的連関を有するのかが真剣に問われない限り、たとえ、「制度・システムの変革」が政策や企業の在り方の環境重視への転換を、「技術の革新」が環境劣化防止を、「意識の改革」が環境教育の充実を目指すとしても、そこでは環境問題そのものが、政策論的な観点を重視する立場（例えばマネジメンタリズム）から見られていることとなり、後述する如く、結局のところ環境問題複合体そのものの本質的解明への道は閉ざされていくのではないかと懸念されるのである。もしその方向を選択するのであれば、環境問題についてはなにも哲学的な努力は必要とされないであろう。マネジメンタリズムの本質は、科学と功利性であって、内的な精神性ではないと考えられるからである。精神への洞察を欠いたアプローチは、問題の本質に光をもたらすことは困難である。そこでは、近代市民社会の輝かしい成果である基本的な諸権利間に生じる衝突、それらの制限と拡大など社会的なレベルでの根本的な問題がただちに浮上してくるのであり、しかもそれらは、事柄

Hosei University Repository

の性質上、社会的・倫理的な原理の再検討へと必然的に遡及せざるをえないのである。このように、環境問題複合体については、マネジメンタリズムはその本質である政策論的な処方において必ずや原理的な問題に逢着することとなるであろう。

しかもその際、原理的な諸問題は、極言すれば、人間の営みのみならず存在者としての人間そのものを問う哲学的な根本問題に収斂する以外にないのである。では、現代の環境問題では、その収斂はどのような性格をもつのであろうか。、言うまでもなく、人間と環境との関わりはなにも今に始まったことではない。古代エジプト文明とメソポタミア地域のレバノン杉の森との関係のように、文明の発生とともにあるといえようが、現代でことさら問題とされるのは、地球ではなく、人類の存続が危ぶまれるに至ったからに他ならない。すなわち、人類の生存と存続こそが、問題の核心なのである。この認識は、急激な環境劣化をもたらした近代文明とその思想的基盤への批判となって現れ、昨今のＷＴＯ問題に見られるように、現代史を彩る様々なイデオロギー対立の再演を醸し出しているようにも思われる。もし事態がそのようであるならば、環境問題とは本質的には核兵器廃絶問題と同次元にあるパラレルな問題に過ぎないこととなる。もしそうでないとすれば、なにはさておき、環境問題複合体そのものの特異性を明らかにしなくてはならないであろう。ここでは、この問題を理解する手がかりとして、環境問題複合体の複雑さを、核の問題と対比させつつ考えることが近道のようにも思われる。

「核の脅威」問題は、環境問題と同じように、人類の生存と地球環境そのものを激変せしめるものとして考えられてきている。だが、それは、核兵器の管理使用に直接かかわる分野の在り方、すなわち核管理能力を含めた軍事技術とそれを支える国防思想さらにそれに影響を与える国際政治環境とが主要契機と考えられる。国防思想は、国際政治に敏感に反応するものであり、後者の環境の改善によってその硬直化から脱することが可能である。また、核を支える軍事技術は、管理技術能力を高めることによって一定水準に維持することが可能となり、国内外の政治の安定化に寄与する。これらのことは、核の問題が、多様な分野にかかわりつつも、決して見通すことのできないものではないことを物語っている。確かに、近年、核拡散の問題を含め、偶発事故の可能性は否定できない。しかし、極端に単純化して言えば、そこには、核管理責任を有する一握りの人間とそれに生存を左右されるその他大多数の人間および生物という、加害者と被害者との明々白々な関係が存在するのみである。したがって、核の問題が本質的に関わる領域は、政治・軍事・科学技術などに限定され、それら領域の関係密度は極めて濃く、かつ明瞭である。このことから、それへのアプローチも方法論的であって十分なのである。たとえば、偶発事故の可能性をも考慮して、国際政治環境の変化に伴う核管理の徹底化、相互視察などの現実的な施策可能性を模索していけばよいのである。マネジメンタリズムは、核の問題においてこそその有効性を発揮するのではないであろうか。

だが他方、環境問題は、核の問題と異質な側面を抱えている。それは、環境問題複合体の持つアモルファスな性格に顕著に現れている。では、そのアモルファスな性格とは何を意味するのであろうか。佐倉氏の指摘するとおり、時間・空間的に明確に規定できないという意味で環境問題複合体のアモルファスな性格を捉えることも可能であるが、さらに、その複合体の質的側面においてそのことを指摘することができるのであり、むしろその面こそ環境問題への哲学的なアプローチの予備的考察を可能とするものであるように思われる。その点を明らかにするために、環境問題の認識過程を形式的に以下のように極度に単純化してみたい。

①人間および自然界での特異な現象の指摘・確認

②その原因を究明するための科学的（すなわち実証的・客観的）な調査・研究

③その現象が人間および自然界に及ぼす影響の科学的なアセスメント

④対策ならびに解決方法の模索

この経緯は、われわれが病気に罹ったときのことを考えてみればなにも環境問題に特有な図式ではないことがすぐに明らかとなる。手足のしびれやけだるさの自覚症状の①段階、医師の所へ行き生活習慣病であることが判明する②段階、現在の生活習慣を変えない場合の将来の危険負担を告知

Hosei University Repository

される③段階、本人がみずからの将来の危険負担を回避したいという意思の確認に基づく具体的な処方箋の提示と受け入れの④段階を迎える。

では、環境問題の特異性は、どこにあるのであろうか。それは、あたかも医師自身が、罹災したみずからの病状を自覚し始める状況に似て、上記の4段階が、他者への医療行為の場合とは異なり、必ずしも時系列的には展開せず、とくに②③④段階が相互に錯綜する傾向を強めることにある。このことは、通常の医療行為の場合における明確な当事者関係すなわち医師と患者という立場が、環境問題においてはあり得ないのではないかとの自覚が暗黙理のうちに、とくに現代の高度なテクノロジー文明を享受している人々に存在するからに他ならないことに起因する。医師は通常、病気を持つ患者の不安を理解しても共有することはないが、現代の環境問題においては、医師自身が病気に冒され、患者としての不安そのもののうちにあるという特異な状況が存在するのである。その不安は、生存を脅かす可能性のある存在状況のうちに否応なく組み込まれ、そこから逃れること自体が現時点ではほぼ不可能であるとの意識から出来している。なにも、学的認識を待つまでもなく、みずからの生存基盤である文明に起因する酸性雨は国境を越え、地域を越えいかなるものの上にも無差別的に降り注ぎ、ダイオキシンに汚染された大気や土壌は、とくにその文明を十分に享受している人間の誰彼の区別なく害毒を体内に流れ込んでいる。ここにみられるのは、高度な現代文明を享受することによってみずからを形成してきた人間自身が、その文明によって生存を脅かされているという自縄自縛の状態なのである。ここにあるのは、被害者が同時に加害者であるという関係である。このように、両者の関係が際だって明瞭になる公害問題と異なる面のひとつは、環境問題の持つこの当事者不透明性のように思われる。

さらに、生存への危機感を醸成する存在状況にみずからが投げ込まれているという深刻な不安感は、②③段階における研究者の姿勢にも影響を及ぼさざるを得ないのであり、この点がさらに環境問題を見通しづらくしている。たとえば、今流行している地球環境関連の入門書を一瞥してみると明らかなことであるが、科学的実証的であることが厳しく要請される②③段階の記述に、往々にして、科学的に立証された事実と単に憶見に基づく事実説明とが混在しているのがみられる。これはなにも、現在入手可能なあらゆる客観的データをインプットして将来の事象を予測する作業の意義を否定しているのではなく、たとえば、AとBふたつの現象の因果関係を一或る明確な意図のもとに？一科学的な論拠を提示せずに断定的に主張する傾向を目にすることがままあるからである。③段階が、また具体的な環境問題の性格によっては④段階が、②段階の諸作業全般を規定している可能性を否定することができないということである。しかも、環境問題そのものの基本的な性格が、科学的にきわめて専門的である以上、われわれ一般人は、その問題に携わる科学者の説明に対して批判的に向き合う十分な力を持ち合わせてはいない。われわれの判断にとっては、それらはオール　オア　ナッシングでしかないのである。あふれんばかりの情報に浸っているわれわれは、実は、その情報の真偽判断に関しては手も足も出ないということなのである。それに拍車をかけるのが、科学技術の価値中立性というわれわれのうちにある素朴な信仰である。高度資本主義的市場経済の動向と密接な関係を持つ現代分子生物学の最先端の領域（例えば遺伝子工学）が明瞭に示すように、この信仰が幻影でしかないとしたら、どうであろうか[2]。もちろん、先進諸国の文明が、かつてない高度の技術文明であるかぎり、とくにそれを支える近代的な諸学の領域がそもそも価値中立的だとは言い難いのである。だがそれにもまして近年の現代技術文明と関連諸学との間に厳然として存在する濃密な関係は、環境問題のアモルファスな性格をいっそう助長しているように思われてならない。

2）イデオロギーとしての性格

問うという行為自体が問われるものをすでに先取しているという哲学的言説が述べること以上のことが、環境問題複合体に関わるわれわれの姿勢のうちに起きている。すなわち、上述のアモルファスな性格に由来する危機感が、覚醒的運動としてのエコロジー、いわゆるエコ・イデオロギーを潜勢的に形成していくこととなる。しかも、環境問題への姿勢がイデオロギーとしての色彩を持つた

Hosei University Repository

めに、それはわれわれ現代人の置かれている状況の見直しを迫り、それをもって既存秩序の様々なシステムへの批判を強めていくこととなる。だが、その批判の由来する精神的背景がいまだユートピア的でしかないことに、ほかならぬイデオロギーとしてのエコロジーの弱点をも見ることができるのである。現在の環境問題複合体の問題性は、上述のように、諸問題の連鎖とその不透明性によって全体の見通しが立たないことにある。このような状況で危惧すべきは、ユートピア的夢想に駆り立てられた現実的施策である経済領域主導のマネジメンタリズムの強化である。そこには、近代資本主義を牽引してきた西欧的人間観の示す自信とそれに裏付けられた人間の進歩についての確信とは裏腹に、われわれ現代人の自己喪失感（見失った存在意義）とそこから派生する自己卑下の感覚とが表裏一体の関係でまとわりついている。とくに、20世紀の大戦の経験は、哲学思想分野でのこの傾向を顕著にしたのである。したがって、今日よく耳にするスローガンである、人間を地球の寄生動物として捉える人間＝パラサイト論さらには人間中心主義否定論はともに、今現在作動しているテクノロジーを制御管理すべき人間能力への信頼とその優位性を根底から覆す可能性を秘めているともいえるのである。このような根本的な問題を孕んでいるイデオロギーとしてのエコロジーは、かつてのイデオロギーの時代のそれとは全く異なる次元の課題を示唆しているのかもしれない。このようなイデオロギーのもつ性急さがもたらす悲劇性を回避するためにも、この新たなイデオロギーの内実を真摯に考えるべきではないかと思われるゆえんである。言い換えるならば、具体的な環境問題のそれぞれが、科学や社会や経済などの複数の領域に関わっているがゆえに、われわれにとってそれらの把握困難性が問題なのではなく、むしろその新たなイデオロギーとしての理論的な根拠をどこに求め、それをどのように形成していくか、が現段階において混沌としていることこそが問題なのである。

とはいえ、環境保護運動を支えるこの新しいイデオロギーの思潮もまた実際には、イデオロギーそのものの本質的な形式である二極対立をその内部において表出している。それはすなわち、既存の経済システムそのものの根本的な変革を志向する外在的な強い批判的態度と、そのシステムの積極的な自己変革を通じての自己管理能力強化を主張する内在的な態度とにみられる対立である。前者は、環境問題の諸悪の根源を西洋近代の資本主義的経済システムに見いだしてその根本的な変革を訴える立場といえよう。他方、後者は、問題の本質を近代西欧的人間観のうちにみいだして、人間の意識変革に基づく文明の質的転換を社会や科学技術の責任ある管理を通じて達成しようとする立場である。言い換えるならば、技術文明そのものを悪と捉える立場と、技術文明そのものの価値中立性を主張する立場との対立である。とはいえ、周知のように、現代の高度なテクノロジー文明の恩恵を十二分に受けている諸地域では、政治・社会・経済のそれぞれのシステムが三位一体の相互依存関係にあり、なかでも経済システムが本質的で中心的な役割を占めているのが事実である。したがって、イデオロギー的対立といいつつも、そこでは上記のふたつの立場に通底している共通の経済システムが人間の存在状況を不可避的に規定しているために、もやはかつてのような深刻な階級間の対立抗争は見られず、自己の良心の重荷を幾分か軽減する疑似科学的なユートピア運動と、諸問題に対するプラグマティックな政策論との対立として現象するのみである。これが、イデオロギーとしての環境問題のもうひとつの特質とも考えられる。そこにみられるのは、批判する者の存在基盤が、当の批判対象そのものの恩恵を受けて存立しているという、だれの目にも明らかな弁証法的な在り方である。だが、すでに述べたように、環境問題複合体にとっての根本問題は、両者がたとえ対立的な主張をなそうとも、それらは根本的な事態へのまなざしをもつことはほとんど期待できないことを示している。たとえば、先述したように、このような思潮のなかでしばしば指摘される環境問題の解決として要請される「技術の革新」、「制度・システムの変革」、「意識の改革」の三セット論のポイントは、前二者の方向付けを担う人間の「意識の改革」にある。環境問題の解決は、ひとえに人間の在りようすなわち「意識の改革」にある、ということになる。総じて環境倫理学を通じての環境教育充実への熱い期待が感じら

Hosei University Repository

れるところである。だが、自己を見失っている現代人にとって、社会的存在としての人間の新たな規範を積極的に創造し、それをもって新世界を構想しようとすることは、はたして可能であろうか。人類の歴史は、意識改革から制度変革への途がいかに困難であるかを物語っている。もちろん、その逆、すなわち制度変革から意識改革への大いなる実験も挫折したことは周知の事実である。とするならば、このような歴史的教訓をふまえてなおかつ主張される今日の「意識の改革」とは、何を意味しているのであろうか。今いるわたしを形成し維持しているわたしの存在基盤を批判し、新たなるわたしとそのわたしを支える存在基盤を創造していくわたしとは、いったい何者なのであろうか。人間は環境を創造すると言うことは真理である。だが、或る文豪が自らの体験に基づいて述べたように、人間はどのような環境にも順応する存在でもあるということもまた真理である(3)。このふたつの真理のうちに、わたしは在る。したがって、上述の問いへの答えが見いだせない以上、上に述べた「意識の改革」についてなされる多くの主張やスローガンは、わたしには何かしらうさんくさい臭いを漂わせているように思えてならないのである(4)。

たとえば、自然への姿勢としての支配から共生へ、生活様式における量から質への転換、閉じた有限の生態系のうちにある一存在者としての自覚など、これらに類似した多くの主張がなされている。これらが、「ーーーすべし」との新たな倫理的な規範・徳目を意味するのであるとしたら、西洋文明を享受しているわたしたちは、近代の西洋的人間観を根底から支えてきたヒューマニスティックな諸観念とそのことをどのように折り合いをつけようとしているのであろうか。そして、そのような課題に立ち向かう人間とはそもそもどのような存在者なのか。現代の環境問題は、このような、解決すべきあるいは問題として自覚すべき根本的な事態を孕んでいるように思えてならないのである。

Ⅱ．哲学的アプローチの意味と意義

上記のような特殊な性格をもつ現代の環境問題とくに地球環境問題は、地域間の対立を醸成しているが、それはたんに経済的政治的格差に起因するのみでなく、その地域に現実に生活する人々の生活感覚やかれらを取り巻く環境への彼らの思想的応答にも深く関わっている。そしてこの認識こそが、環境問題への哲学的アプローチにその可能性を与えるように思われるのである。ただしここで注意すべきは、このアプローチが、環境問題全般の解決のための即効薬では決してないということである。技術の驚異的な進歩は、それを扱う人々の現場で新たな倫理的・法的な問題を惹起し、社会のなかにはその具体的かつ現実的な解決策を早急に倫理学や哲学に求める風潮がある。その風潮は直ちに倫理学や哲学への失望感となって表明される。だが、哲学思想は、たんなる浅薄なイデオロギーでない限り、まず自己の状況の理解を目指し、それに基づいて新たなものへの目指しを生み出していくべきであろう。では、その際の哲学的アプローチは、いかなる性格をもつこととなるのであろうか。この問題について、以下においては、哲学思想のグローバル化の意味、および哲学思想の本性的な制約としてのローカル性について考えてみたい。

1）思想のグローバル化の意味

アモルファスな性格をもつ環境問題も、地球環境レベルではその影響が全世界に及ぶことは明白である。この環境問題のボーダーレス化は、他の領域におけるボーダーレス化、すなわち資本主義的市場経済の論理が必然的に引き起こす経済活動のボーダーレス化、およびサイバー技術の驚異的な進歩に拠る情報・通信のボーダーレス化などと軌を一にするものであり、近代的な主権国家観そのものの根本的な見直しをも迫るものである。環境問題のこの側面すなわち環境問題とくに地球環境問題は地球規模で解決しなくてはならないという認識こそが、環境問題そのものを考える思想的営為にも時間・空間やさらには既成の概念枠を超えた普遍的でグローバルな視点を要請するものなのである。環境倫理学における地球全体主義や生存権の拡大さらには世代間問題等の主張は、この認識に沿ったものといえよう。

だが、われわれは、そこでいわれる「グローバルな視点」ということでいったい何を理解しているのであろうか。もしそのことを、地球的規模で

Hosei University Repository

の全体的な視点（思惟対象の拡大？）と解するにしても、地球的規模の全体的な視点で考えるとはそもそも何を意味するのかという根本的な問いが生じ、問題がなんら解決していないことを示すのみである。たとえば、コスモポリタニズムを標榜する古代ストア派の倫理的形而上学的思惟を復興させるだけでことが済むと感じる人は少ないであろう。なぜ、そのように感じるのであろうか。この素朴な感覚にこそ、現代という時代の時代性がにじみ出ていると言えよう。この、思想に求められる現代性とは何か、について真正面から取り組んでいくことが、環境問題への哲学的アプローチにまず要請されることでなくてはならない。

さて、戦後世界史が示すように、資本主義的市場経済の各地域への浸透は必然的にその地域の政治システムや社会システムを自由主義的民主主義なものへと変質せしめていく。その際に、自由主義的民主主義社会の主要な理念（自由・人権など）が普遍妥当性を有するものとみなされ、それによって、その地域の人々の生活様式全般を規定してきた伝統的な価値観の変質が意識的ないし無意識的に生じてくるのである。このような事実を通じて、それらの理念はさらにいっそうの普遍性とそれに起因する強制的威力とを増していくこととなる。しかし問題は、近年の宗教的ナショナリズムの台頭や南北問題に見られるような、生活様式を根底から規定している価値観の深刻な対立相克の状態をどのように捉えるかにある[5]。その際、コント流の楽観主義的な歴史哲学をもってこの状態は将来的には必然的に克服されるべき一過性のものとすることは容易であるが、環境思想においてその進歩史観とくに近代以降の西洋文明の歩みそのものがたとえ内部であろうと再検討されつつある現在、このような楽観主義的な態度は安易といわざるを得ないであろう。そこでは西欧的な価値観とそれに依拠する生活様式が真っ向から挑戦を受けているのである。もしそれらが人類の目指すべき普遍的な目標であるとするならば、なぜ抵抗を受け、なぜ西欧圏においても真摯な見直しへの機運が醸成されているのか説明しなくてはならない。これらの事情は、直ちに次のような問いを準備する。すなわち、われわれ西洋文明の恩恵に浴している人間のよって立つ自由主義的民主主義社会の主要な理念の普遍妥当性の根拠はどこに求められるのであろうか、と。それは、それら自体のもつ真理性なのかそれとも政治力学的な威力なのか。われわれにとって重要なのは、それらの理念がこの両者の側面を有しているということである。剥き出しの政治的威力が真理という観念によって覆われているとしたならば、その真理の真理性、それらの理念の権利問題をまず問わなくてはならない。ここにもまた、現代の環境問題への哲学的アプローチの意義が見いだせるのである。それは、環境問題を考える際に用いられる諸観念や諸理念を批判的に再考することであり、それを通じてそれらの権能を明確にすることである。現在声高に叫ばれる地球全体主義も大地の哲学も、その理念のよって立つ思想的な土壌が積極的に批判されない限り、たんなるスローガンにすぎなくなるであろう。むしろそれは、われわれの生存を脅かす危険な側面を助長する可能性がないとはいえないのである。

そのことは、たとえば、環境問題一般に関するディープ・エコロジーの基本的立場からも明瞭に読みとれる。その基本的立場は、次のように要約されるであろう[6]；

「人間はその存在において他の生き物に依存しているが、他の生き物はその存在を人間に依存してはいない」。

この言明から直ちに引き出せるのが、人類＝パラサイト論である。この帰結はとくに現代史におけるヨーロッパ・ユダヤ人＝パラサイト論が顕著に示したように、人類全体の生存にとって危険な内容を含んでいる。将来の人類が抱える大きな問題のひとつである人口増大と食糧問題にこの論理が適用された場合、われわれが直面するのは、徹底的な管理主義とエリート主義であるかもしれない。もしそうであるならば、ナチズムに対する軍事的勝利はその思想的勝利を意味しなかったということを、われわれは痛感させられることになるであろう。重要なことは、西洋近代文明の果実のすべてを否定するのではなく、そのどれを活かしていくのかを問うことである。そのためには、現代文明の土壌である西洋近代哲学思想それ自身の自己批判の営みがなされなくてはならない。これを怠ったとき、真理の名の下に新たなる抑圧が始ま

Hosei University Repository

るかもしれないのである。とはいえ、哲学思想の自己批判とは、たんなる近代批判であってはならず、その哲学思想の土壌それ自体の発掘もなされなくてはならないと思われる。たとえば、上記のディープ・エコロジーの立場を表すその同じ言明から、全く異なる帰結が同じ精神土壌から引き出せることができるのである。このことは、精神土壌それ自体の豊かさと柔軟性を示すことに他ならない。以下にピーコ・デラ・ミランドーラ・ジョバンニの言葉を紹介してみたい(7)。

「神は世界を創造したまい、そのあらゆる場所にそれにふさわしい存在を配された。天には天使たちを、地には地をはう動物その他を、そして最後に人間を造りたもうた。しかしすでにすべての場所は、他の存在によって占められており、特に、人間を入れる場所はない。だから神は、人間の使命を、神の造りたまいし世界の荘厳を眺めることにされたと共に、人間は自らの自由意志によって、天なる天使たちに近寄ることも、また地をはう動物に類することも勝手であるとされた。」

このように、「思想のグローバル化」という課題もまた、決して単純なものではなく、むしろ環境問題と同様に、未知の困難性を内包している。思惟対象をグローバル化するだけでは、すでに述べたように、何の意味もない。また、それらの諸理念が、発生論的には歴史的（すなわち時間・空間的）に制約されたものであることをもって、それらの限界をもっぱら主張するだけでは将来にわたって何の意味ももたないであろう。むしろ重要なことは、グローバル化をめざすさまざまな思想が、おのおの根本的に制約されたものであることを相互に承認する積極的な意欲を持つことのように思われる。思想のグローバル化とは、その思想の自己批判を通じての他思想の承認に他ならないということである。

2）哲学思想のローカル性の意義

すでに明らかなように、環境問題における「思想のグローバル化」という課題は、現在の世界で優勢な西洋的な高度技術文明を支える諸理念を最普遍妥当的なものとして無批判的に受容浸透せしめることで解決する問題ではない。ましてや西洋近代以降の「自然vs人間」図式を持ち出して、支配関係から共生関係を強調したところで、それは単なるスローガンにすぎない。というのも、そこで用いられている自然・世界・人間などの観念自体とそれらの有する本質的な連関構造について徹底した哲学的批判がなされていないように思われるからである。さまざまな思想圏でのこれらの批判的営為こそ、思想のグローバル化にまず要請されることのように思われる。

たとえば、「大地の思想」を考えてみよう。「あらゆるものを育む大地」という観念は、そのノスタルジックな面は別として、聖俗両面から批判を受ける余地を残している。科学的な観点から見れば、あらゆるものを育むのは大地そのものではなく、生態系上最終的には有機物を無機物に転換する土中のさまざまなバクテリアや細菌類に他ならない。とするならば、生存権を最優先的に認められるべきは彼等ということになってしまう。イルカや鯨以上に彼等は地球環境維持に貢献していることを忘れてはならないのである。優しさと共生とは異なるジャンルに入るのであろう。しかも、彼等バクテリアや細菌類の存続には彼等の食料たる有機物が供給され続けなくてはならない。しかし、高度な文明社会の存在する地域では公衆衛生の観点に立つ都市環境政策によって土壌の貧困化は極限にまで押し進められている。このように、土壌を犠牲にしてわれわれの享受する文明そのものが成立している以上、われわれそのものが環境問題においてアポリアの前に必然的に立たされているのは自業自得といえなくもない。この事態は、西洋近代文明の精神的土壌を形成している諸理念が環境問題全般の解決に向けて有効性を発揮するかどうか疑わしめるものに他ならないであろう。他方、「あらゆるものを育む大地」という観念は、一見科学的な観念と受け取られやすいが、そこには母なる大地をカソリック信仰の聖母マリアと、さらには古代のイシュタルやデメテルというその淵源を石器時代に遡ることのできる大地母神信仰と同一視して理解しようとする思想的背景が厳然として存在する。

これらのことは、環境問題に関して語られるさまざまな観念が決して単純なものではないことを物語っているのであり、したがって、それらの普

Hosei University Repository

遍妥当性は批判的に考えなくてはならないことを意味しているのである。

では、それらの観念を批判的に考える、とは具体的にはどうあるべきなのであろうか。周知のように、哲学思想（特に形而上学思想）は、洋の東西を問わず、他の諸学と比較して抽象性の極めて高い学である。この高度な抽象性と諸教説の主張する普遍妥当性とは、いやしくも理性的な学である以上そこで用いられる最普遍妥当的な論理的思考の諸原理・規則と、その対象となる存在・神（神々）・人間・世界（自然）という観念が内包するそれぞれの普遍的な意味とそれらの相互関係に由来すると考えられる。とくに、「神（神々）・人間・世界（自然）」観念のトリアーデ構造は、時間・空間を問わず人間のあらゆる哲学的思惟にとって不可欠な契機となってきたし、現代もその意義は減殺されているようには思われない。もちろん、今日の高度文明社会を特徴づける徹底した世俗性は、神（神々）の観念を真正面から問題にすることを拒否するために、後者のふたつの観念のみが問題とされる場合が多い。だが、存在一般の根拠を問う哲学的思惟においては、このトリアーデ構造そのものを完全に排除することは不可能に近く、それらは偽装されて表出される場合が多いのである。とするならば、環境問題の本質についての哲学的アプローチにおいても、この観念構造を無視することはできないこととなる。むしろ、現代の環境問題を考えるという積極的な態度にこそ、この観念構造が重要な契機として機能しているように思えてならないのである。とするならば、その際の問題は、この観念構造をどのように自覚的に取り扱うかということになってくるであろう。

これらの観念の探究に関して、人類の英知が今日までその膨大なエネルギーを消費してきたことは、さまざまな哲学史の教えるところである。したがって、これからの問題は個々の観念それぞれが有する意味の解明だけではなく、むしろ、それら観念の相互依存性・相関性すなわちそれらの相補性そのもののもつ意義を発掘することにあるのではないかと思われる。それらは、あたかも一定総量を構成する複数の部分量の間に成立する相関関係に酷似しているとも言える。たとえば、定量10を構成する部分量（A、B）は、A＋B＝10を満たす関係で相互依存的ありその組み合わせは有理数としても無限である。この単純なモデルでも明らかなように、パラメータそのものが増加すればそれだけいっそう複雑な相互依存関係が成り立つわけである。このことをヴィジュアルに喩えれば、星の布置すなわち星座といえるかもしれない。一定数の有限な可視的恒星によって構成される星座は唯一ではなく複数個存在可能だからである。これらのことを先の観念のトリアーデ構造に適用してみるならば、構成観念個々にたいするアクセントの相異によって、全く異なる図柄が現出することを意味する。この相異性は、諸思想の本性に関わるものであり、「思想のローカル性」を根拠づけるものと理解することができる。すなわち、諸思想の示す時間・空間的制約は、アクセントの置き方や強弱によって決定されてきたとも言えるであろう。したがって、個々の思想のそれぞれがグローバルでありうるのは、その思想の構成契機である上記の観念そのものの普遍性によるのであり、表出される意味連関としての星座それ自体は、あくまでも時間・空間的に根本的に制約されたものとしてローカルであり続けるのである。そしてこの星座が、その時代その地域の人々の生活様式を根底から規定する価値観を表現しているのである。そこでは英知的存在としての人間それ自体が問題なのではなく、時間・空間的に制約された存在者としての人間（ゾーオン・ポリティコンとしての人間）が問題なのである[8]。このような存在者としての人間の根本的制約として機能する観念のトリアーデ構造のもつアクセントは、たとえ或る観念の意義が0ないしマイナスであろうとも、そのこと自体は構造を毀損することなく、むしろ構造全体にとっては有意味であり続けるのであって、決して無意味となることはあり得ない。たとえば、人間と自然の対立のみを主題とすることは、神の観念の消極的取り扱いを前提とする土壌すなわち世俗性がその背景をなしているということになり、この事態が哲学的なさまざまな考察を可能としていく。哲学的営みは、意識的無意識的に関わらず、この構造に常に触れているのである。

とするならば、さらに歩を進めて、みずからのよって立つ星座の自覚的批判を通して他の星座との相対性を認識する途が拓けるであろう。その途

Hosei University Repository

の意味するところは、均質的調和ではなく相補的調和という理念である。ここでの相補性というのは、巴印に似て、アクセントの相異によって図柄がウサギにもなりカメにもなりうることを意味しているのであって、本質的に異なる複数の存在者が相関関係に立つ相対性を意味するのではない。したがって、環境倫理学の試みが普遍的学としてその普遍妥当性を繦おうとしても、それの依拠する星座があくまでも西洋的思惟の特質を表出するかぎり、グローバル性を追求することは徒労に終わるであろう。むしろ、どの星座にもグローバル性を一方向的に主張強要する権利はないことを認識すべきではないであろうか。

さて、上述の星座は、それを構成する星々に意味を付与する権能を持っている。たとえば、その具体例として「世界」の観念を採り上げてみよう。

われわれ、高度に世俗化された社会に住む人間にとって、世俗的な視点すなわち自然科学的で合理的な視点では、その観念もまた自然科学的色彩をもつ。したがって、世界、宇宙、地球の観念の混同や同一視化が起こることとなる。だがここに奇妙な現象が生じる。ヴィジュアル化された地球や宇宙の画像が、先のトリアーデ構造の他のふたつの観念を強く想起せしめることとなるのである。現代の最先端テクノロジーを備えた宇宙飛行士の多くが、宇宙からの帰還ののち示すあの宗教的感情（人間の卑小さと聖なるものへの畏怖の念）をどのように説明すればよいのであろうか。これからの哲学的思惟がまず取り扱うべき人間の観念とは、実在しない抽象的人間それ自体ではなく、老若男女としてまた大地に根ざした生活者としてある人間であるべきことを物語っているエピソードである。

では、このようないわゆる生活者としての人間を想定するとき、その人間にとってそこで生活する世界とは一体何を意味するのであろうか。普遍的観念である「世界」の相貌の具象性に注目してみよう。M. エリアーデは、古代の宗教いやもっと基底的な民族宗教以前の古代人の宗教感覚として、さらには現代のプリミティブな社会においても散見される宇宙宗教と世界軸・宇宙木の観念を挙げている[9]。これらの観念は、人間の生活領域の時間空間的在り方を明確に規定するものであって、聖なる場を中心としての特定の秩序圏域を形成する契機となるものである。とくに、これらの観念の空間的本性は、自分たちの理解可能な領域すなわち自分たちと自分たちが価値や意味を付与している存在者たちとの共生関係の上に成り立っている社会の存在と、自分たちのまったく了解できない領域すなわちカオスの存在とを指示している。古代王権の意義は、ブドウの木やイチジクの木に象徴される秩序をライオンや蛇に象徴されるカオスから守ることにあったと推察される。この古代人の宗教意識すなわち生活意識は、各種族や部族において固有の形態をとり、たとえば、同一地域を支配下においたアッシリアとバビロニアとでは、世界それ自体が異なっていたのである。ジグラッドや宮殿の地理的位置の相違がすなわちかれらの生活する世界の相異を端的に表しているのである。J. ブルーノを待つまでもなく、人類はその歴史において無限世界を実践的に経験してきたのである。あの山の向こう、この川の向こう岸は、オオカミの跋扈するカオスであり、邪悪をもたらす蛇の住処なのである。聖なるものの顕現すなわちヒエロファニーによって、人間の世界はかろうじて維持されている。このような意識は、現代のプリミティブな社会でも次第に摩耗しつつあり、世俗化された高度文明社会に住むわれわれの意識においてはほとんどその痕跡もみられない、と一般的には考えられている。果たしてそうであろうか。現代市民社会の理論的祖型である社会契約論の背景に見え隠れする宗教的なるものへの共鳴、さらには近時の環境問題関係の論文に垣間見られるガイア思想、さらにはもっとも卑近な例としての映像文化における未知なる存在者への恐怖と関心は、すでに失ってしまったものや失われつつあるものへの一種のノスタルジアを表明しているのかもしれない。とくにガイヤ思想においては、「生命体としての地球＝ガイア＝大地＝聖母マリア」という図式を展開するものもある。この極端な例はさておき、環境問題の解決への提言として聖なるものへのまなざしの必要性を説く学者もいる[10]。それらは無意識的にせよ、先の観念構造における諸契機のバランス回復を目指しているのかもしれないのである。したがって、問題は、地球をひとつの生命体と見なすことの科学的な論拠そのもの

Hosei University Repository

の真偽性にあるのではなく、むしろこのような形で欧米の思想家たちがみずからの伝統的な精神土壌へと回帰していくその姿勢にあるのである。蜂密とミルクのあふれる約束の大地への帰還というイメージをうちに秘めて大地（土地）の思想を展開することが、地球的な規模の環境問題解決への普遍的な提言となりうるのか、考えるべきであろう。これは、すでに述べたように、或る特定の精神風土にのみ妥当する思想であり、聖なるものの観念の普遍性は、その存在にのみ関する普遍性であって、その内実の無限多様性を考慮していかなくてはならないはずである。カナンの地で育まれた宗教性は、ドゴン族の生活規範にはとうていなり得ないのである。

以上のように、思想のローカル性とは、具体的な環境状況のうちで具体的な存在である人間が行う営みに発するのであり、思想的営為の本性そのものを根本的に規定している契機といえるであろう。このことは、諸思想の主張する価値観の相互相対化をもたらすのであるが、それは他の価値観に対してであって、けっして個々の価値観そのものの影響力低下を意味するものではない。さまざまな価値観の相互関係としての相補性を可能とするのは、先述のトリアーデ構造それ自体の遍在性にある。というのも、長い歴史過程における完全な喪失や忘却は別として、神ないし神々の観念を全くもたない種族民族は存在しないのであり、環境（自然）と世界をもたない種族民族は存在しないからなのである。いわゆる人間の居住圏に存在するそのようなさまざまなトリアーデ構造の内部では、既述のように聖俗の色調の変化は起こりうるのであるが、たとえば、構造Aが他の構造Bに吸収され消滅する事態は極めてまれであり、多くの征服者が被征服者の文化に征服されてきたように、その構造の痕跡は必ず維持されていく。そこで、このような強度をもつ構造の諸契機の布置すなわち星座を哲学思想的に明らかにすることが、環境問題にとって重要な課題となってくる。というのも、その星座こそが、その星座のもとで生活している人々の価値観を育み、その人々の生活環境を形成しているからである。環境概念は、決して一義的ではなく、このように、具体的かつ多義的なのである。したがって、この星座研究は、いわば他者存在の承認行為そのものである。有限個の恒星からなる無限個の星座の重層性は、相補的多様性からなる一性という調和を意味する。人間それ自体が実在しない以上、人間それ自体の規範性を追求しても、環境問題複合体の解明と解決には無力ではないであろうか。具体的普遍の現成は、思想それ自身のローカル性の自覚を出発点とすべきであろう。

おわりに

環境問題の難しさは、そのアモルファスな性格に由来する。したがって、それへの対応はややもするとイデオロギー化しやすい。しかし、そこに往々にして見られる事態は、或る特定の価値観の押しつけや強要である。これは、過去のイデオロギー対立の再演に他ならず、環境問題の解決には何ら寄与しないであろう。では、どこに突破口を求めればよいのであろうか。それは、人々の生活様式を規定する《神々ー人間ー世界》観念のトリアーデ構造が示す思想の「ローカル性」に依拠する諸思想の「双方向的なグローバル化」すなわち相補性としての調和の可能性をまず哲学的に模索することである。その「ローカル性」とは、地域性、極言すれば「風土」にほかならない。たしかに今日の情報化社会の驚異的な発展は、世界を小さなものにしている。しかし、それはたんに情報技術という科学的側面からの理解であり、その技術をどのように利用するのかはその地域の風土に依存するものでなくてはならない。利便性と生活の充足感とは質的に異なることは、高度文明社会に生活するわれわれは痛感しているはずである。この事実に依拠しない限り、環境思想は独りよがりのものとなってしまうであろう。今日、この数百年間に環境劣化を著しく招いた文明とその背景をなす思想を断罪することが流行となっているが、それでは何の問題解決にも寄与しない。というのも、環境劣化という観念自体がうさん臭いものを漂わせているからである。本来、環境とは人間存在に本質的で不可欠な相関者であり、環境劣化という観念は、「劣化」という価値を環境に付与する存在すなわち人間なくしては考えられないはずである。ところが、あたかも哲学的な実体概念の如く環境がそれ自体で存在するかのようにまず考

Hosei University Repository

え、しかるのちに、人間がどのようにしてそれに対処すべきかが論じられている風潮がある。人間は、環境に対しているのではなく、環境のうちにあり、不断に環境を創造しつつもそれに馴染んでいるのである。誤解をおそれずにいえば、地球にとっての環境としての地球環境は、純然たる自然科学の研究対象であり、人間存在とは直接的な関係はないのである。このことの無知は、数百万光年先の超新星爆発が人間存在にもたらす意味を考えようとする姿勢と、たいして変わらないと言えよう。地球に対する人類の責任という観念が何を意味するのか冷静に考えなくてはならない。したがって、環境問題に関しては、あらゆる分野が発言可能であるが、そのなかで何が「人間とその環境」にとって緊急度が高いのか、を見極めていく必要があろう。その際の考える手がかりを、環境問題への哲学的アプローチの可能性が開示するのではないであろうか。環境マネジメンタリズムのみが先行する事態は、結果として未曾有の人間管理に至る危険性を孕んでいることを肝に銘じるべきであろう。

(1) 佐倉　統『現代思想としての環境問題』〈中公新書〉中央公論新社、1999年、7版、5頁以下参照。

(2) C. Deane Drummond, " Theology and Biotechnology ", Geoffrey Chapman 1997. pp80
著者は、ここで除草剤に強い種子の品種改良開発における企業の役割について述べている。今日の各方面でのあらゆる技術開発は、企業の援助なくしては不可能であり、それは、LISENCEによる市場独占とそれによる莫大な富の集中を意味し、決して開発途上国の国民全体の生活のレベルアップを意味しないのである。テクノロジーそのものはみずからの可能性を徹底的に追求するが、それを可能とするのが企業の論理なのである。また、近年のES細胞の開発事情は、公的機関（ここではNIH；国立衛生研究所）による倫理的規制が一私企業（ジェロン社）によって無力化された経緯を物語っている。このような事情を現代の哲学者（とくに倫理学者）はどのように理解するのであろうか。

(3) ドストエフスキー『死の家の記録』より。

(4)「意識の改革」運動とは、環境問題についての人々の啓蒙・啓発を意味する限りにおいて、わたしはその重要性を否定するものではない。だが、ひとつの問題は、このような運動に伴いがちなエリート主義的意識である。さらに深刻な問題は、注 (2) で述べたように、この運動の過程で高度な市場経済の論理に人々が無意識のうちに巻き込まれていく危険性である。環境良品購買という名目の下で新たな経済至上主義に屈服していくかもしれない。生活のさまざまな領域における技術的進歩は、発展途上国の極端な貧富の差が物語っているように、あらゆる人とくに社会的弱者に恩恵をもたらしているのではないことを認識すべきであろう。

(5) M. K. ユルゲンスマイヤー『ナショナリズムの世俗性と宗教性』阿部美哉訳、玉川大学出版部、1995年、I「宗教対世俗的ナショナリズム」参照。

(6) C. Deane Drummond, " Theology and Biotechnology " , Geoffrey Chapman 1997. pp56.
ここで著書はP. Taylorの言説を次のように要約している。
" For Taylor, the earth would actually benefit from human extinction; ' our presence, in short, is not needed'"

(7) 高坂正顕『西洋哲学史』創文社、昭和50年、215頁よりの孫引き。

(8) アリストテレースは、かれの『政治学』第7巻第4章以下（岩波文庫）において、最善国家の構成とその在り方について、非常に実証的な研究をなしている。このことは、たんなる観念的な人間本性からの演繹ではなく、とくに生活者としての人間（アテナイ人）の現実を彼の研究が踏まえていたことを物語っている。これには、それに先行する実証的な研究としての『アテナイ人の国制』（岩波文庫）を忘れてはならないであろう。

(9) M. Eliade, " Patterns in Comparative Religion ", Biston Books 1996. Chapter X, p367-382

(10) C. Deane-Drummond, " Theololgy and Biotechnolgy ", Geoffrey Chapman 1997. p143-155
著者は、この箇所で、古代中近東の思想的伝統のうちにあるwisdomやsophiaの環境問題に対する積極的な役割を評価している。